大学院ニュースレター

久留米大学大学院医学研究科

第１１３号／２０２５年６月１日発行　　編集／　医学研究科長

『“正解のない世界”を歩むあなたへ』

環境医学講座　教授　石竹　達也

1992 年からの 1 年間、私は家族とともにイギリス・サウサンプトン大学音響振動研究センターに滞在しました。医学ではなく工学系の研究所で、ラボには 10 名を超える研究者が所属しており、振動刺激が人に与える影響や、自動車企業と連携した座席シートの振動伝達特性の研究など、世界を代表する研究が数多く行われていました。

出発前、恩師の的場恒孝名誉教授からは「たった 1 年なのだから、研究の成果を追い求めるよりも、イギリス人の考え方や生活様式、文化を肌で感じてくることを優先しなさい」とアドバイスを受けました。その言葉どおり、私にとってこの 1 年は“研究成果を残す”というより、“研究者としての幅を広げる”ための貴重な時間となりました。

滞在初日のラボミーティングでは、私がこれまで行ってきた動物実験（うさぎの腹部に振動刺激を与え、耳介の新生血管の血流を観察する研究）について紹介しました。すると、最初の質問は「それは動物虐待ではないのか？」というものでした。日本では許容されていた研究手法も、文化や倫理観の違いの前では大きく捉え直さねばならない――そのカルチャーショックは、今でも鮮明に記憶に残っています。

ラボには午前と午後にそれぞれお茶の時間があり、研究とは無関係の話題で盛り上がるのが日課でした。テニスや週末の過ごし方、昨日の料理の話など、研究者同士が「雑談」で信頼を深めていく姿に、ある種の「研究者の余裕」を感じたのを覚えています。

このラボでの出会いは、単なる 1 年限りの関係にとどまらず、その後の研究生活にも大きな影響を与えてくれました。異なる専門性を持った人たちとの交流は、研究テーマの広がりだけでなく、柔軟な思考法や視野の広がりにもつながったように思います。

生活面では、家族 4 人での滞在もまた、多くの学びと発見に満ちていました。居住地が決まるとすぐに、地域の GP（General Practitioner）を訪ねて家族全員を登録しました。NHS（国民保健サービス）という無料の医療制度と、医療の“入り口”としての GP の存在には感心させられました。一方で、ある日、長女が急な歯の痛みを訴えた際、公的な歯科医では緊急対応ができず、やむを得ずプライベートの歯科医院を受診して抜歯してもらった、ということもありました（もちろん有料です）。制度の長所と限界、その運用の実際を家族の医療を通して体感できたのは、医療に関わる者として貴重な経験でした。

研究の合間には家族とともに多くの旅も楽しみました。ドイツのボンでの国際学会に参加し、ドイツ国内をレンタカーで巡ったり、その年に開園したユーロディズニーランドを訪れたり。イギリス国内でもバーミンガム、オックスフォード、ケンブリッジ、バースなどを訪問しました。最初は新鮮だった郊外のなだらかな丘や牧草地も、しだいに日常の風景となっていきました。

夏の季節には、私の両親が 1 か月ほど滞在してくれました。仕事一筋だった父が孫とゆったり過ごし、英語が話せないながらも近所のパブに通ったり、公園の草刈りをしていた職員にビールを差し入れたりと、積極的にボディランゲージでコミュニケーションをとっていた姿が印象的でした。私とは性格がまったく違うのに、不思議と馴染んでいく――異文化のなかで人とのつながりを楽しむ力は、言葉以上に大切なのかもしれません。

さて、大学院生の皆さんへ。

今、目の前の研究に没頭している皆さんの多く

は、「論文を出すこと」「成果を上げること」に意識を集中していることと思います。それはとても大事なことですし、逃げてはいけない責任でもあります。ただ、それと同時に、“その研究を通して自分がどんな視野を広げ、どんな生き方をしていきたいのか”を問い直すことも忘れないでいてください。

研究には正解がありません。そして研究者としての歩みには、思いがけない偶然や人との出会いが大きな意味を持つことがあります。ですから、自分の専門領域を離れてみること、他の文化や分野に触れてみること、自分とは違う価値観に出会ってみること――それらは、決して“遠回り”ではありません。

大学院時代、あるいは卒業後に、もし留学の機会があれば、ぜひトライしてみてください。経済的な要因や、臨床経験とのバランスなど悩むこともあると思いますが、それを乗り越えて得られる経験は、その後の人生のさまざまな場面できっとあなたを豊かにしてくれるはずです。

研究者として、人間として、より広い世界とつながる一歩を、ぜひ踏み出してみてください。

皆さんのこれからの研究の歩みが、柔軟で、しなやかで、そしてどこかに小さな楽しみがあることを、心から願っています。

『カロリンスカ研究所での学位取得経験から考える日本の学位制度』

薬理学講座　教授　西　昭徳

博士の学位を取得してから、早いもので30年以上が経ちました。私がスウェーデンのカロリンスカ研究所（Karolinska Institutet, KI）に留学した際、幸運にもPhDコースに編入し、Medical Scienceの博士号を取得する機会を得ました。決して高い志をもって計画的に目指していたわけではありませんでしたが、振り返ってみればこの経験は、私にとって将来を大きく左右する貴重な財産となりました。ここでは、私のKIでの博士号取得の経験をもとに、久留米大学、そして日本の大学院での学位制度について考えてみたいと思います。

１．学生への制度的･経済的支援：KIの PhDコースでは、学生は「将来の研究を担う若手研究者」として位置付けられ、授業料は無料、さらに給与が支給される仕組みが整っていました。これにより、生活の不安を抱えることなく、研究に専念することができます。一方、日本でも支援制度は用意されつつあるものの、多くの学生は奨学金という借金を背負い、学費や生活費の面で経済的負担が大きいのが現状です。経済的負担の軽減が、今後の日本の学位制度の課題と言えるでしょう。

２．学位審査プロセス：学位審査に進むには、５編程度の原書論文（第１著者としておよそ３編を含む）をまとめた博士論文を作成し、図書館で１ヶ月間公開する必要があります。その後、外部審査員を交えた公開審査（Public Defence）が行われます。公開審査では、オポーネント（Opponent）と呼ばれる独立した外部の専門家が招聘され、博士論文全体を批判的に評価したうえで、申請者との詳細な議論が行われます。私の論文テーマは「Regulation of Na^+,K^+-ATPase by dopamine」という高血圧モデルラットを用いた研究でした。そのため、高血圧研究の権威で『Hypertension』誌の編集長を務められていたGerald Dibona教授がオポーネントとしてアメリカから招聘されました。学位審査当日、Dibona教授は私の博士論文に対して、容赦無く次々と質問を投げかけてきました。こうした質疑応答が２～３時間にわたって続くのが一般的であり、論文内容の妥当性だけでなく、研究の背景知識、得られた結果の解釈や科学的理解力、さらには「研究者としての資質」までもが厳しく評価されます。研究者としての本当の実力が試される機会だったと感じています。このような経験を振り返ると、久留米大学の集談会での学位審査は、講演と質疑応答を合わせて17分程度と、あまりにも“優しすぎる”と感じざるを得ません。欧米の教授たちが「日本の博士号はあまり信用できない」と口を揃えて言っていたのも、こうした基準の違いが背景にあるのかもしれません。

３．博士号に対する社会的評価：日本との最大の違いは、博士号に対する社会的評価とその重みにあると言えるでしょう。欧米諸国では、博士号の取得は「一人前の研究者」としての自立を意味し、医師や研究者として活躍するためには不可欠な資格と見なされています。そのため、博士号を取得しているかどうかは、周りの評価や期待に大きな違いをもたらします。また、公開審査が無事に終了すると、学位申請者がこれまで指導してくれた教授・教員やラボのスタッフ、親族を招き、博士号取得を祝う盛大なパーティが開くのがスウェーデンでの慣例でした。日本では「学位審査の公平性に疑念を生むのでは」と思われるかもしれませんが、こうした場は、学位取得者がこれまでの指導や支援に対して感謝を伝え、研究者としての新たな決意を示す大切な機会となっていました。

これからの日本の研究を担う若手研究者を育てるためには、大学院教育や学位審査制度の一層の充実は不可欠です。今回、KIでの私自身の経験をもとに、基礎研究の観点から海外の学位制度の一端を紹介しましたが、留学経験を持つ基礎・臨床の教員の皆さんも、海外の大学院制度について多くの知見をお持ちだと思います。さまざまな観点からの知見を集約することが、日本の博士教育の将来像を具体的に描くための、有力な手がかりになると信じています。

『常識は普遍的なものではない』

感染制御学講座　教授　渡邊　浩

常識は社会的に当たり前と思われる行為、物事のことであるが、海外に行くと日本では常識と考えられていることが通用しないということも珍しくない。私はこれまで約30ヵ国への渡航歴があるが、経験談の一部を紹介したい。

1）アメリカでの経験

私はアメリカ、アイオワ大学に約1年7ヵ月間留学中様々なトラブルを経験した。渡米後購入した中古車に欠陥がみつかったのでディーラーに持っていった時、担当の陽気なおじさんが「保障期間なので大丈夫、１週間もすれば部品がくるから連絡するよ」と言うので安心していた。ところが連絡がないので電話すると彼は私が車を持っていった直後に解雇されたとのことで、おまけに部品の注文もされていなかった。他にもある日突然郵便物が来なくなった（配達する人が変わったのが原因）、テレビの衛星放送をつける時のトラブル（約束した日時と違うときにやってきて取り付けが大幅に遅くなった）、バスが時間通りに来ない（アルバイトでバスの運転をしていた大学生が道を間違った）など、数え上げればきりがない程のトラブルがあった。しかし、段々こういったトラブルにも慣れてきた。ほとんどのトラブルは対応した人にその原因があり、何か問題が生じた時は担当の人を変えれば対応の仕方があっさり変わり、解決してしまうことが少なくないのだ。但し、アメリカではこういったトラブルもきちんと文句を言わないとこちらの責任ということでかたづけられてしまうので、クレームはつかないといけない。おかげで何度もトラブルを経験するうちに英語で文句が言えるようになってしまいました（笑）。

2）アフリカでの経験

30年近く前になるが、外務省巡回医師団で約1ヵ月間東アフリカの国々を訪れた。数日おきに移動する旅であったが、事前に先輩からアフリカは電気事情が悪くよく停電すると聞いていた。実際、滞在中何度も停電を経験したのだが、ある時ホテルの水がでなくなった。アフリカでは水力発電が主流であったため当然電気も止まり、2日間停電、断水という状態になった。シャワーを浴びることもできず不快だったが、仕事が終わりホテルに戻ると部屋にマネージ

ャーからの手紙が入っていた。お詫びであろうと思いながら読むと、「現在の停電、断水は行政の誤りによって起こっているもので我々には何の責任もありません。」という内容であった。不快な上不愉快になったことは言うまでもない。この日の夕食時は前日にはなかったコーヒーがあったが、同行している先生が「昨夜ホテルの人達がプールの水を桶で運んでいたので、このコーヒーはその水で作られたものに違いない。」と言われなるほど思ったが、もはや沸かしているからいいかという感じであった。

他にもホテルにチェックイン後部屋に入るとベッド上に知らないおじさんが寝ていた（フロントに行くとお詫びもなく部屋を変えられた）、チェックアウト時請求書を見ると3回朝食を食べたことになっているのでクレームをつけると、3枚のサインを見せられた（1枚は私だが、2枚は別人）、レストランで出された食事に虫が入っている（連れて行ってくれた現地の人は5匹目を見つけたときから怒り出した）、空港で身体検査時に賄賂を要求される（右手指を動かしながらファンタという言葉を繰り返していたが、ファンタを飲みたいからお金をくれということらしい）など、数え上げればきりがない程のトラブルがあった。

よく「グローバルに生きる」と言う言葉を聞くが、常識は場所によって異なるということを理解することから始まるのかもしれない。ただ私は海外から帰国するといつも「やっぱり日本が一番落ち着くなあ」といつも実感しているので、グローバルには生きていないのだろう。

～NEWS～

◆第 10 回研究発表会の日程が決定しました

修士課程 1、2 年生希望者及び博士課程原則 2、3 年生を対象とした研究発表会が今年度も 12 月 8 日（月）・9 日（火）に開催されます。参加者の方はご自身の研究の進捗状況を把握し、客観的なフィードバックを得ることができる機会となります。ついては、詳細が決まり次第、順次周知してまいります。

事 務 通 信

◆事務連絡について

事務連絡については個別対応的なものは各自のメールアドレスなどを利用しますが、**全体的な連絡については主に電子シラバス Hondana を利用して伝達を行います。**

また、「久留米大学大学院医学研究科ホームページ」や「久留米大学大学院医学研究科 Facebook」もご利用ください。

❄ 電子シラバス（hondana）HP
https://hondana.kurume-u.ac.jp/

❄ 久留米大学大学院医学研究科 HP
https://www.kurume-u.ac.jp/faculty/gmed/

❄ 久留米大学大学院医学研究科 Facebook
https://www.facebook.com/kurumeugsm/

◆現住所等が変更になったら・・

在学時に現住所が変更になりましたら、必ず「学生現住所変更届」の提出が必要になります。

また、メールアドレスや電話番号が変更になった場合も、教務課までご連絡ください。重要な書類がお手元に届かない場合がありますので、ご協力をお願いいたします。

なお､久留米大学大学院医学研究科で学籍移動に関すること､学生生活や各講座の事務手続き上、公開可能で必要な書式については、本ホームページの下記アドレスから書式をダウンロードすることが可能です。主たる手続きごとに分類していますので、必要な場合はダウンロードし、必要事項を記入のうえ、医学部事務部教務課へご提出ください。

◆久留米大学大学院医学研究科学位の申請について

学位申請に関する書類については、下記アドレスから書式をダウンロードすることができます。ダウンロード後はマニュアルに沿って下書き作成の後、医学部事務部庶務課に提出をし、下書きチェックを受けてください。

下書き点検のチェックを受けなければ、学位申請書類は受付することができませんので、余裕を持って申請書類作成に取り掛かってください。詳細は学位担当までご連絡ください。

医学部事務部庶務課 学位事務担当　内線：3018 ／ ダイヤルイン：0942-31-7527

メールアドレス：igakubu_syomu_gakui-group@kurume-u.ac.jp

医学研究科書式ダウンロード

https://www.kurume-u.ac.jp/student-affairs/graduate-school/gmed/info-1/

◆令和７年度 大学院セミナーシリーズ（特別講義）のお知らせ

担 当 講 座	講 義 日 時	会　場	講 演 者	講義テーマ
感染医学講座（基礎感染医学部門）	6 月 5 日（木） 17:00～18:30	基礎 3 号館 1 階 セミナー室	長谷部　太　先生 （長崎大学　熱帯医学研究所教授）	Treasure every meeting -アフリカで繋がった感染症研究、アルボウイルス研究からコウモリ由来感染症調査研究-
法医学講座	7 月 17 日（木） 18:00～19:30	基礎 3 号館 1 階 セミナー室	近藤　稔和　先生 （和歌山県立医科大学法医学講座　教授）	「法医学研究の過去・現在・未来」ー法医学を発信源とする医科学の発展を目指して
疾患モデル研究センター	9 月 24 日（水） 17:00～18:30	基礎 3 号館 1 階 セミナー室	岡野　栄之　先生 （慶應義塾大学医学部生理学教室　教授）	未定

担 当 講 座	講 義 日 時	会　場	講 演 者	講義テーマ
外科学講座	10 月 21 日(火) 17:00～18:30	基礎 3 号館 1 階 セミナー室	紅林　淳一　先生 （川崎医療福祉大学　医療技術学部 臨床工学科 特任教授）	乳癌の生物学的特徴とトランスレーショナルリサーチ
医学教育研究センター	11 月 6 日（木） 18:00～19:30	基礎 3 号館 1 階 セミナー室	及川　沙耶佳　先生 （秋田大学大学院医学系研究科 医学専攻 社会環境医学系先進デジタル医学・医療教育学講座 特任教授）	医学教育研究における研究手法や科学哲学について
解剖学講座（顕微解剖・生体形成部門）	11 月 27 日(木) 17:30～19:00	基礎 3 号館 1 階 セミナー室	樋田　一徳　先生 （川崎医科大学　解剖学講座 教授）	未定
解剖学講座（顕微解剖・生体形成部門）	1 月 9 日（金） 17:30～19:00	基礎 3 号館 1 階 セミナー室	吉田　松生　先生 （自然科学研究機構 基礎生物学研究所 発生生物学領域 生殖細胞研究部門 教授）	未定
感染医学講座（真核微生物学部門）	未定	基礎 3 号館 1 階 セミナー室	真柳　浩太　先生 （九州大学　薬学研究院 臨床薬学部門 講師）	未定
医療検査学科	未定	基礎 3 号館 1 階 セミナー室	柳沢　正史　先生 （筑波大学 国際統合睡眠医科学研究機構 機構長）	未定
公衆衛生学講座	未定	未定	未定	未定
整形外科学講座	未定	未定	未定	未定
院生会担当/生理学講座（統合自律機能部門）	未定	未定	未定	未定

※今後の予定を掲載しています。

未定の日程については、決定後、電子シラバス（hondana）で情報提供します。また実施しない場合もありますので、ご了承ください。日程や講義会場が変更になることがあります。変更後の情報も、電子シラバス（hondana）で紹介します。

また、当該科目履修者は 5 回以上のセミナー出席およびレポートの提出をお願いいたします。

レポートについては、各セミナー終了後 1 週間以内に、医学部事務部教務課までご提出ください。

履修者以外の方も自由聴講が可能ですので、是非ご参加ください。

編集後記

大学院事務担当は教務課：林田・大曲、庶務課学位申請担当：立石・内山で皆様のサポートに努めてまいりますので、何かございましたらお気軽にご連絡ください。